

子の圓座をその内にまゝ、略○下

〔類聚雜要抄〕四、五尺屏風十二帖

月次繪、四季ヲ各當三帖畫之、春上、中、母屋四箇間、東西北三方料、略○中

四尺屏風二帖、一帖泥唐繪、調度後料繪十二月之、  
内、枚別當二月書之、一帖泥大和繪、

〔古今著聞集十一〕畫圖、一條前攝政殿、左大臣におはしましける時、居すへたてまつらんとて、一條室町の御所を、光明峯寺入道前備中守行範に仰て修理せられにけり、寛仁三年十月廿七日御わたまし有けり、つくりども、少々あらためられけり、寢殿二棟の障子より、つねの唐繪は無念也とて、平等院寶藏の四季の御屏風を、二條前關白殿長者にておはしましけるに申されて、取出してうつされにけり、人々の姿もみな昔繪にてぞ侍るなる、いと見所あり、武德殿の競馬の所に、みもまらぬ人のすがたどもおほかり、嵯峨野の御幸に、御輿の上に虎の皮をおほひたるなど、ふるき事どもをか、れたる、いと興有り、承保の野行幸には、虎のをばおほはれざりけるとなん、近衛大殿の御相傳の屏風どもは、皆寶物にて侍うへ、そんなればとて、四季の大和繪を、一月を一帖に書て、あたらしく調せられたるとなん、可然事の時、客の座に立らる、也、元日の節會は、豐樂院の儀をぞ書て侍なる、延喜の御時の月の宴、御溝水のながれやうなど、ふるきにたがへずか、れたる、いと興ある事になん侍なる、

〔古今著聞集十一〕畫圖、弘高地獄變の屏風を書けるに、樓の上より梓をさしおろして、人をさしたる鬼を書たりけるが、殊に魂入て見えけるを、みづからいひけるは、おそらくは我運命つきぬと、はたしていく程なく、てうせにけり、六條宮、具平、御堂に申給ひけるは、布障子の役などには、今は弘高をばめさるべからず、輕々なるべき事也、弘高聞て自愛しけり、此弘高は、金岡が曾孫、公茂が孫、深江が子也、